

探訪 北の風景 70

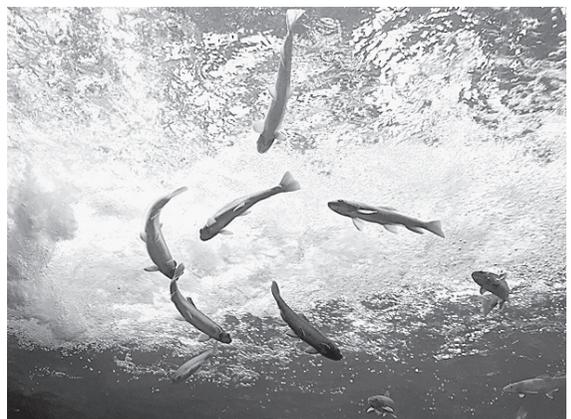
北の大地の水族館 北見市留辺薬町

青木和弘



勢いよく流れ落ちる滝つぼに銀鱗をひるがえして舞う魚たち。まるで生命のきらめきのようにだ。「北の大地の水族館」の展示で、まず驚くのが「滝つぼ水槽」の迫力と爽快さだ。「冬に凍る川の水槽」では、オシロコマやジマスなどが川底でうずくまっていたり、ゆつくり泳いでいたりする。氷の下は水が流れている。この水槽は寒さを逆手にとった世界初で世界で唯一の水槽である。

もう一つ、北海道にしか棲息しない天然のイトウが見られる水槽がある。1メートル級の天然ならではのスラリとした美しい魚体を15匹も飼育しているのはここだけだ。2月にはこの水槽にワカサギの群れが投入される。温根湯（おんねゆ）温泉に水族館ができたのは1978年。「山にだって川には魚がいるのだから水族館があってもいい」と、当時の留辺薬（るべしべ）町が観光資源の一つとして建設したのが「山の水族館・郷土館」である。高度経済成長で温泉街は団体客でにぎわい、同館も開館から6年ほどは年間4万5千人が訪れ順調だった。しかし、バブル経済の崩壊で北海道経済は疲弊し、温泉街もホテルや店の廃業がつづき、同館の来訪者も半減した。留辺薬町は2006年3月、北見市と合併に至る。当時、旭山動物園（旭川市）の「行動展示」が人気を呼んで、2006年に年間入園者が300万人を突破する大ブームになっていた。「山の水族館をリニューアルしよう」という声があがり、市はスタッフに、「できないことでもいいから、どんな水族館にしたいのか絵を描いてくれ」とアイデアを託した。水族館職員から、当時、カリスマと呼ばれた水族館プロデューサーの中村元氏の招へいの声があがった。建物の新築を含めて当初予算は2億5000万円である。数十億円はかかるといわれる水族館建設には少なすぎると断られるに違いないと思ったが、職員の熱意が通じ、中村氏は快諾してくれたという。中村氏の提言は①公共の水族館は建物にお金を



展示の最初が「滝つぼ水槽」で、滝つぼの主になった気分で見上げると、勢いよく落ちる水に魚たちの銀鱗が輝いて美しい。まるで生命のきらめきのようにだ

掛け失敗している②どう見せるか展示の工夫が大切③大人が魅力を感じない水族館は失敗する④水族館には魚よりも「水塊（すいかい）」に癒やしを求めて来る—というもので、これが今までにない水族館づくりの基本方針となっていく。2011年に着工し、中村氏は事業費切り詰めのため、水族館機能の根幹以外は、役所の担当課や施工業者が啞然とするほど仕様のグレードを落とした。住民も協力し、水槽に入れる擬木は高価なので造林業者が原木を提供。池の草木植栽は職人のボランティア。水槽の石積や川石敷きは水族館職員が自ら行った。資金が一番節約できたのは、豊富で抜群にきれいな地下水を使えたことだという。ほとんどの水槽をろ過設備が必要ない掛け流しにできた。



「冬に凍る川の水槽」では氷の下で過ごす魚たちのめずらしい姿を間近に見ることができる。例年だと完全結氷するが、今冬は暖かく、1月17日現在も日中はどこかが解けている状態だという（この写真は北の大地の水族館提供）



北海道だけにしか棲息していない天然のイトウは、スラリとしていて色も形も美しい。1メートル級に育つには10年から15年かかるといふ。ここにはそんな魚体が現在15匹いて、これほどの数を飼育しているのはここだけだといふ。

世界の熱帯淡水魚の水槽には地元の冷鉱泉を使うなど多彩な水槽を設置しながら、総工費は3億5000万円だった。この費用は中規模水族館の20分の1だという。中村氏のボランティアプロデュースの賜である。

新水族館は2012年7月7日に開館し、大評判になった。連日、マスコミが押し寄せ、1年間の入場者は29万4385人。7年経ちブームが去った昨年度は、胆振東部地震などで観光客が激減したが、それでも9万9250人と、目標の約2倍を達成していて、温根湯温泉に欠くことのできない人気施設になっている。現在、大小24個の水槽に約50種3000匹を展示。施設は市が所有し、運営は「道の駅おんねゆ温泉」などと同じ果夢林（カムリン）ショップ運営協議会が担っている。